

ツシユ帯を捲く。次の三〇^ノ（熊滝）は上に五^ノ程の高
きの砂防ダムをのせている。左岸の高捲きで上に出る。

再び平凡となるが、今度はゴミが目立ってくる。砂防
ダムを越えるともう不動沢橋だ。一五^ノ滝がまつている。
岩がもろくて危険なので、少し戻って左岸のガレ場を登
り、スカイラインへ出る。（記・一）

〔タイム〕

高湯七・〇〇―不動沢出合七・一〇―不動滝九・三〇
―不動沢橋一一・三〇

上流部廻行

一九七五年七月十四日

◆天気（晴）

久しぶりの太陽を拝みながらの快適な沢登りを楽しん
だ。高湯から不動沢に入り廻行を開始する。水量は減っ
ているし、三度目の入谷でもあるのでピッチははかどる。
ゴルジュ帯も最初の滝の直登に多少手間どった他は不動
滝まで一気にかけぬける。不動滝から上の砂防ダムまで
大きく高捲いて更にピッチを上げる。

不動沢橋の上に出たのが一時少し過ぎと快調なペー
スだ。昼食をとり橋の横を伝って沢床に降りまた沢に登
りはじめる。砂防が二つあり、いずれも左岸を捲くが沢
は平凡だ。やがて七^ノの滝。水量が多くてシャワークラ
イムは危険なので左岸にとりつき高捲く。この上はナメ
が続いていた。また平凡な沢にもどり退屈しはじめこ
ろ、五^ノのナメ滝である。このあたりのナメはきれいだ。
これをすぎればまた平凡。滝を期待してなおもつめてゆ
くと四〇^ノのナメがあつて、その奥に六^ノの滝がある。
右岸を登りその上のナメをすぎると沢が二分した。ここ



不動沢・不動滝

がシモフリ新道との出合である。

小休止の後また登りはじめるが、ナメ滝二つを越えた後は滝のかからない平凡な沢となり、やがて両岸に岩場が見られる沢幅の広いゴロ状のところに出る。もう源流も近いと気持ち新たに遡行を続けるとやがて沢が二分した。左の沢はシモフリ山の方についているらしい。

本流は右なので右沢に入る。もう何もあるまいと思つていたのに急に沢幅が狭くなり小滝がかかる。別にどうということもないが広々とした所から急に狭い所に入ったので変な感じだ。ここを過ぎればまた広い沢になり再び二分する。今度は左の沢に入る。沢幅がまた狭くなつてナメ滝がかかる。

ここをぬけると左手に岩場が見えてきた。一四時一分である。らくだ山の岩場であると思われたので、沢からはなれて岩場にとりつく。岩がもろく落石に気をつかいながら登りきると、やはりらくだ山であった。あとは浄土平へ出てバスに乗りこむ。

〔タイム〕

高湯七・二〇―不動沢出合七・四〇―不動滝九・一五―不動沢橋一一・〇五―シモフリ新道出合一三・一五―

沢終了一四・二〇―らくだ山一四・二五―浄土平一五・二〇

表紙説明

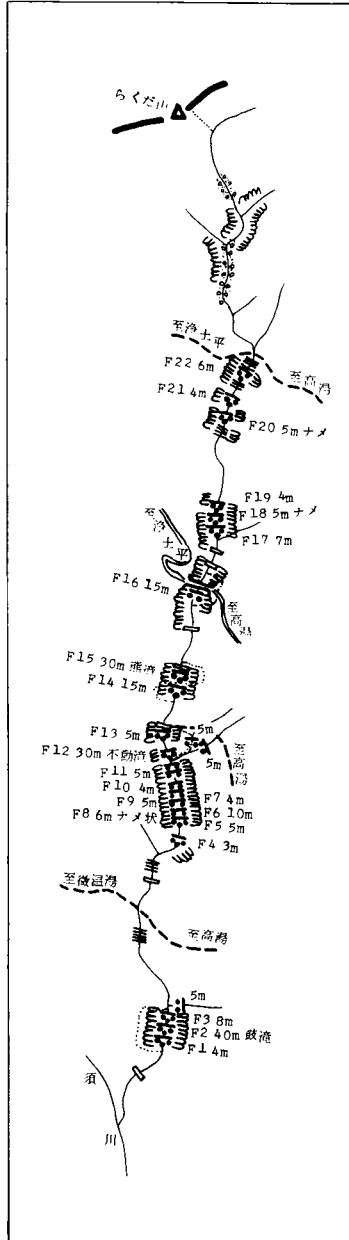
沢登りの魅力の一つは意外性にある。突然出現した大滝にルートをどうとるべきか議論をかわす。直登できるか、高捲きか。捲くならどちらを捲くか。そして決断。判断が正しくて、たいした苦勞もなく越えることができる時もあれば、バカみたいな回り道となることもある。一つ一つにそのパーティーの力量が問われる。

写真は松川にて。撮影・

裏表紙

沢が多くて登山者をひきつける原因の一つはその造形美にある。静かなせせらぎ、豪快に落下する水、あわだつ流れ、静まりかえつたトロ……。明るいナメもあれば暗いゴルジュもある。広々とした流れもあれば、V字にするどく岩をえぐって流れることもある。一つ一つが我々をまた沢登りにかりたてる。

写真は樽川の静かな流れ。撮影・



不動沢 (作図:)

このあとは小滝が次々とあらわれるが、いずれも沢になれた人なら簡単にルートを見つけて突破できると思う。ゴルジュも終わりに近くなる頃、壁や岩に鉄分が沈着しているのが見られる。中には何となく鐘乳洞を連想させるものがある。

ゴルジュを終了すると沢が明るくなってすぐ不動滝。三〇以上の落差を一気に落下するのは見事である。不動滝はとても直登できないので大きく左岸を捲く。少し戻って左岸から流入する小沢に入る。小沢はすぐ二分しどちらにも滝がかかっているが、左側の滝を登る。岩がもろく浮き石も多いので注意が必要だ。滝を登りきった所で

すぐ左へヤブをこげばぼつかり昔の登山道に飛び出す。昔はかなり歩かれたにちがいない道だが、どこから登ってきているのかわからない。これを登ると昔の硫黄精練所のところの道へ出る。

沢に入って二時間ばかりである。高湯が眼下に見おろせて、時間の割に距離をかせいでいないのに多少がっかりする。車道に出た所で左に曲がり沢に降りれば砂防ダムのすぐ上である。下に小滝が二つ程確認できた。

また沢を登りはじめたが、前の小沢が温泉のまじったあたたかい水だったので、水の冷たさに身ぶるいする。明るい平凡な登りがしばらく続いて一五以上の滝。右岸のブ